

三浦梅園の子女について

脇 谷 末 雄

はじめに

三浦梅園については、『梅園全集』や、田口正治氏著『三浦梅園』など、詳述を尽した著書で知ることが出来る。

梅園の生誕地安岐町では、現職の町長・中尾弥三郎氏が陣頭に立って、梅園研究会を発足させ、研究成果を揚げていることは、他の市町村で見られない床しいものを感じる。

昭和四十七年に、大分県内の私塾・寺小屋跡の調査が実施された。当時、大分大学助教授であった鹿毛基生氏が、同年十一月二十五日の「朝日新聞」に、「九州最古の寺小屋・載星堂」と題して執筆したのを読み、私塾・寺小屋跡調査に感動させられた。

豊後高田市でも、県の指図があつてか、旧跡調査が行われ、幸にして調査の片棒を依頼して来た。何しろ調査ごとには素人であるので、鹿毛助教授との文通をもとに、市内の旧跡を探し廻り、約二ケ年間懸命に奔走した。

その後、近郷の足跡も回り、筆子中・門弟中と刻み近まれた墓石に関心を持つようになり、碑文を書き写す事に興味を覚え、きた。磨滅した石からは僅かな文字しか読みとれず、何回となく足を運んだ。

十二分な史料とは言えないが、三浦家に所縁のある墓の碑文から少し乍ら述べてみたい。

永松氏略系

大儀寺過去牒參考
墓碑銘によつて作成

初代
四郎右工門

即心院覺翁了田居士
明和九年正月廿四日没

二代
久敬 (松原氏入籍)

昌山玄榮居士
寛政五年正月廿一日没

三代
克孝 (拜助)

大岳清音居士
文化十五年四月十三日没

妻菊 (三浦氏)

瑞嶽妙相大姉
文化二年四月五日没

女 (天)

惟孝

仁山玄壽居士
嘉永二年十月九日没

妻千ズ (松村氏)

仁室智靜大姉
安政四年五月廿九日没

女 (出仕)

克家 (皇次)

圓山淨通居士
文政三年六月廿四日没

妻篠 (荒卷氏)

紫雲妙旭大姉
文化二年八月四日没

後妻形 (溝部氏)

円室貞操信尼
文政六年二月廿六日没

女 (三浦氏)

祐賢 (古城氏)

善之 (皇治)

謙叟惠讓居士
元治元年八月十七日没

妻カズ (三浦氏)

文質惠藻大姉
天保七年二月廿八日没

〇 (天)

(中野重固次子)
善元 (彦五郎)
函海惠量居士
安政六年四月九日没

貞克

克久

女 (天)

男 (古城氏)

靜

壯三郎

留七 (三浦氏)

男

男

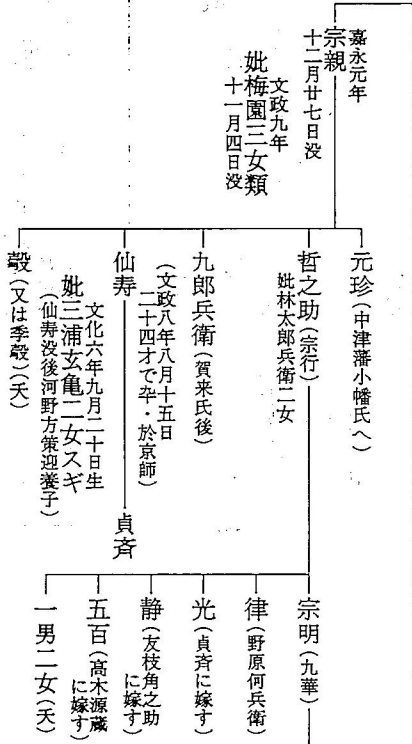
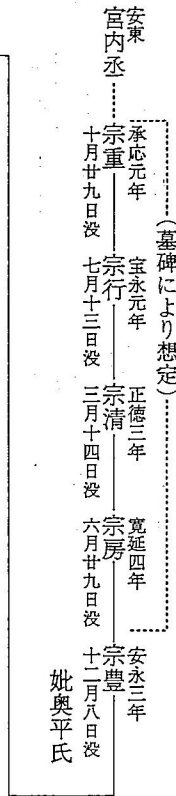
女

妻靜

少室惠林大姉
大正二年二月十三日没

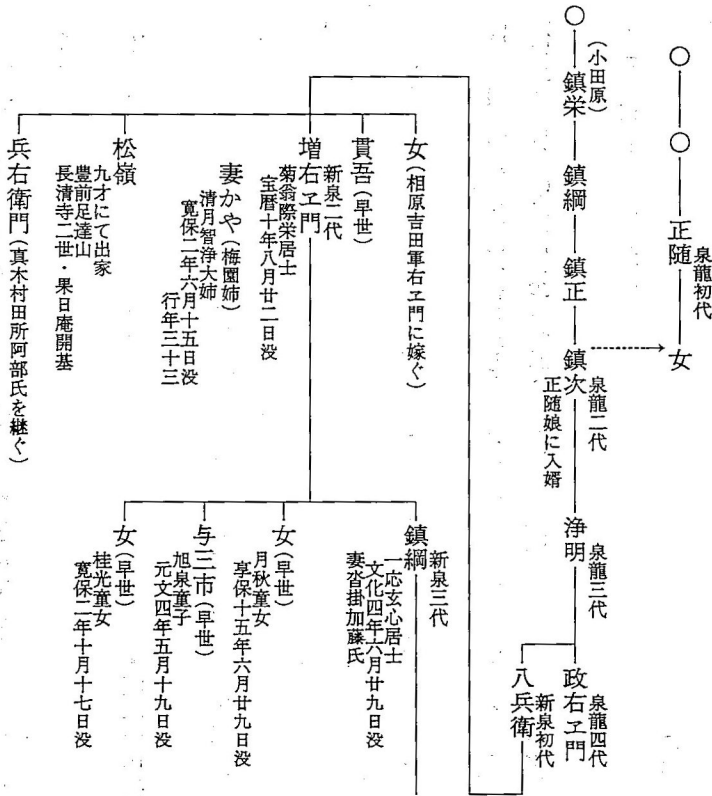
安東氏略系

(墓石に依り作成)



小田原氏略系

(小田原直幸氏調)



但し執筆にあたっては、三浦家で生まれた女性の墓を散見して、纏めたものであり、敬称を省略した。

一 三浦梅園の娘

三浦梅園は最初西氏を娶り、次に渡辺氏を娶り、次に寺島氏（つな）を娶った。西・渡辺の両氏は夫婦縁がうすかったのであろうか。

梅園には五人の子供があった。第一子は黄鶴（思堂先生）で、杵築市の東泉寺墓地に、第二子は女で、富永（安岐町）の梅園墓地に、第三子も女で、野田（安岐町）の大儀寺墓地に、第四子も女で、佐野（豊後高田市）の正覚庵墓地に、第五子は玄龜（大年先生）で、梅園墓地にお墓がある。

梅園の妻つなは、明和二年（一七六五）長女を出産した。明和四年（一七六七）に二女が誕生し「菊」と名付けた。明和五年（一七六八）六月、長女は四才で死亡した。梅園は四十才を越えて子供に恵まれたので、長女の死は梅園にとって悲しみは一入であった。

明和六年（一七六九）梅園は、娘の死を悼み詩を書き残した。その意味は次のようである。「夢は消えた、どうすることも出来ない、冥途の娘が蝶に化して、自分に会いに来て呉れているのに、風吹くな、蝶が逃げるではないか」と、切実な思いを表している。

梅園の墓の後に、僅か四才で死亡した娘の墓がある。

黛月翠柳童女

（富永梅園墓地）

明和五年戊子六月二十四日夭

三浦安貞女 寿 四歳

明和六年（一七六九）、三女「類」が誕生し、梅園の娘は三人目となった。

慶安三年（一六五〇）頃、曾祖父、清兵衛義正が一町畑に屋敷を構えて以来、百二十年の歳月が流れている。三方山に囲まれた長閑な富永の里は、三浦家にとっては安住の地となっていた。

梅園とつなぬ温かい愛撫は、二人の娘を素直に成長させた。二女の菊は、野田村（安岐町）成松の海老屋、永松克孝（寿助）に嫁いだ。菊はまだ十五才位であつたろう。菊が嫁いだ海老屋は、醤油の醸造を家業とした商家であつた。

海老屋の菩提所大儀寺の過去牒に依ると、「仁右衛門別家、永松四郎右衛門の子、源三郎成松に住す。号して海老屋」と記録している。大儀寺墓地には、海老屋の墓が歴然と残っている。

海老屋初代四郎右衛門は、称号「即心院覚翁了圓居士」、明和九壬辰年（一七七二）正月二十四日に死亡した。四郎右衛門には男の子がなく、娘に久敬（松原氏）を入婿として迎え、海老屋二代四郎右衛門を名乗った。

久敬の子は四人で、長男の克孝（寿助）が、養父の醸商を受け継ぎ、自持ちの田畑を耕作した。二男の克家は別家で産業を営んだ。次は女で三浦氏に嫁し、三男祐賢は古城氏の後目を継いだ。久敬は妻に先立たれ、後妻に高崎氏から来ていたが、没したので土谷氏を娶った。その後、久敬は寛政五年（一七九三）正月二十一日、五十七才で没した。

寿助と菊は親譲りの家業に日夜精励した。そして菊は一男一女の母親となった。男の子は惟孝、通称四郎右衛門と言った。大儀寺の過去牒や墓石の碑文などからして、代々四郎右衛門を襲名している。また、女の子は「出仕」とあり、杵築藩に仕えたのであろう。

寿助と菊は、家業に専念する傍、舅、姑に孝養を尽した。斯くして三代に亘る労苦は、後世、海老屋が繁昌した試金石となつたのであろう。菊が嫁いで二十有余年、三十九才の働き盛りで、寿助より十三年早くこの世を去った。

端嚴妙相大姉

永松克孝妻三浦氏名

（大儀寺海老屋墓地）

菊文化二年乙丑四月

梅園の三女類は、佐野村（豊後高田市）の安東貞五郎（宗親）に嫁した。宗親の先祖は、天正八年（一五八〇）鞍懸城の戦いで大友方に味方し、その勲功によって、佐野の邑を賜った。（『西国東郡誌』）

庄屋職を命ぜられた時期は定かでないが、庄屋跡が現存している。屋敷は周田を堀で巡らし、土塀で囲んだ内側は、広大な面積を保った構えで、流石庄屋ならではの面影を残している。宗親の父は宗豊、母は奥平氏、宗親は八才の時父と死別し、それから母の手ひとつで育った。

類は宗親に嫁して、五人の男の子を産んだ。長男は元珍で、中津藩小幡氏へ、二男の哲之助（宗行）が累代の家を継いだ。三男九郎兵衛は賀来氏に、四男の仙寿は医を業として隣り屋敷に別居した。末っ子の穀（季穀？）は幼くして死亡した。強く生き抜いた姑は、宗豊に後れること三十六年、文化七年（一八一〇）十一月六日、他界した。

類は我が子四人を立派に成長させた。然るに類は夙に五十才を過ぎていた。その後、類は文政九年（一八二六）十一月四日、夫の宗親に先立った。正覚庵跡の片隈みに、宗親と類の夫婦墓が建っている。

法名 松嶽道寿居士

（正覚庵墓地）

賢峯妙養大姉

信女姓三浦氏諱類杵築富永村學山先生三女文政九年丙戌十一月四日卒寿五十八

府君諱宗親稱貞五郎後改弥太右衛門號一清／考諱宗豊妣奥平氏嘉永元年戊申十二月廿七／日卒寿八十二妻三浦氏學山先生第三女生五男／長元珍出為中津藩小幡元薫次先哲之／助嗣家次九郎兵衛出為賀来氏後次仙寿為醫／先卒季穀天

嘉永三年庚戌夏六月 孫 宗明謹識

三浦義一(虎角)の子は、長女が「かや」、二女は「くめ」、長男が萬勝、三女「よの」、二男が晋(梅園)、四女「りく」で、萬勝とよのは幼くして死亡した。長女かやの生年は、宝永七年(一七一〇)、梅園より十三才年上で、田染村(豊後高田市)小田原増右衛門に嫁した。

小田原氏の先祖は、頼朝の命により、中原親能軍の先陣として、豊後の国に下向した古庄重能が、大神・大野向氏を平定して、田染庄小田原村を領し、小田原と改姓しようだが、約四百年間の系譜が決定的でない。

慶長五年(一六〇〇)石垣原の戦いで、小田原又左衛門(鎮綱)が戦死、孫の鎮次が泉龍(龍泉庵寺道場時代)の女に入婿した。泉龍四代政右衛門の弟八兵衛が分家、新泉初代となり、増右衛門はその二代目となった。(元田染嶺崎在住、現所沢市居住、小田原直幸氏系譜による)

かやは増右衛門に嫁して、二男二女を産んだ。長子は鎮綱で、新泉二代の家つぎとなった。次に女子が生まれたが、享保十五年(一七三〇)死んだ。次は与三市ができたが、元文四年(一七三九)五月十九日死亡した。四人目に女兒が生まれたが、かやは産後の肥立ちが悪く、寛保二年(一七四二)六月十五日、嬰兒を残して死亡した。その後、十月十七日、遺児も死んだ。増右衛門は、度重なる不幸に落ち入った。その時、梅園は二十才であった。姉と嬰兒の死亡を深く悼んだ梅園は、涅槃石像を刻み、合座の正面に亡姉の法號を、右に三年前死んだ与三市の戒名、左に嬰兒の戒名を、背面に「富永村三浦安貞姉」・「小田原増右衛門妻」と陰刻した墓碑を届け、万感胸に迫り、やる瀬ない供養をしている。

(一) かやの法号

(合座正面に)

寛保二戌天

清月智淨信女

六月十五日

(豊後高田市岳へら墓地)

(一) 与三市の戒名

(台座右側に)

元文四未天

旭泉童子

五月十九日

(三) 嬰兒の戒名

(台座左側に)

寛保二戌天

桂光童女

十月十七日

(四) (台座右面に)

富永村三浦安貞姉

小田原増右衛門妻

くめはかやの直々の妹で、両子村中分次郎丸、財前卯十右衛門に嫁した。卯十右衛門とくめの墓は、財前家末裔、財前和弘氏所有の墓地にあって、墓碑に法号などを記してあるが、「くめ」の文字を確認できなかった。(安岐町中分五郎丸、財前家墓地)

(財前卯十右衛門墓)

安永七戌天

一照浄玄居士靈

八月廿二日

(くめの墓)

天明六年丙午天

圓妙院覺壽慈貞大姉

七月二日

義一の長男萬勝は、享保四年(一七一九)、三女よのは、享保六年(一七二二)、共に四、五才で早世したようだ。

梅園の妹りくは、古川升(安節)に配し、姓を冒し三浦を名乗る。りくの法名は、「明智院昌屋妙蓮大姉」、宝曆十一年(一七六一)五月二十七日没した。安節は、再妻として隈井氏(名は千賀)を娶ったが、千賀は明和八辛卯年(一七七二)五月十日没し、法名「編照智散信女」。更に古川氏(名は楽)を後妻に娶った。楽は天保三辰年(一八三三)三月二十九日、安節より遅れる事三十九年にして死亡した。

三 三浦玄龜の娘

梅園の息子は、長男が黄鶴(恩堂先生)、二男が玄龜(大年先生)である。長男の黄鶴が杵築藩に出仕したので、二男玄龜が梅園の家を継いだ。

玄龜は三男三女の父親で、大淵、正次郎、安肅(英治)、カズ、スギ、トシの六人であるが、二男正次郎は早世した。長女のカズは、文化二年(一八〇五)の生まれで、伯母(菊)の婿寿介の弟、克家の子、善之(呈治)に嫁した。

話はかわるが、伯父の黄鶴に五人の子供があった。長男は早世、後の四人は女子であった。三女の静野は、杵築藩主第八代親明の側室である。また、婿呈治の従兄弟惟孝の妹も出仕した。

三代かけて基礎づくりをした海老屋も、四代目となって、非常に繁昌し、杵築藩下屈指の郷町人となり、醤油醸造の外に青

莖を取り扱い、巨万の富を得たであろう。

大儀寺住職雲巢和尚は、呈治の墓碑銘を誌した。その碑文に「漸く盛也」と明記しているので、この頃から繁昌したのである。

カズは、天保七年（一八三六）二月二十八日、三十二才の若さで病没した。また、婿の呈治は、元治元年（一八六四）八月十七日、カズより後れる事二十八年、享年七十五才で没した。

文質惠藻大姉

（大儀寺墓地）

三浦氏名加寿永松呈治／妻天保七年丙申二月廿八日病卒享年三十二

謙叟惠讓居士

姓永松諱善之字呈二継父業而恒有密行識之人少陰徳陽報天鑑無私家世漸盛也娶三浦氏女養中野善元為子以女静娶之寿七十五元治元甲子八月十七日逝令孫善繼就余乞碑文同應其需 當山雲巢謹誌

文化六年（一八〇九）九月二十日、玄龜に二女が誕生した。名はスギで、長女のカズより四才年下である。医師の家に生まれたカズは、十四、五才で伯母（類）の子で医を家業とした、佐野村（豊後高田市）安東仙寿に嫁した。仙寿はスギより七才年上であった。文政七年（一八二四）十一月十九日、スギは男児を出産、名を「和」と命名した。スギと仙寿の悦びもさる事ながら、もつとも悦んだのは伯母の類であろう。類の家では哲之助に未だ子供がなく、初孫の誕生である。類は悦びに堪えなかつたことであろう。

文政八年（一八二五）三月二十五日、類の家でも哲之助（宗行）に長男の宗明（九華）が誕生、今度は内孫で、宗親と類の悦びは一入であった。

この悦びも束の間、同じ文政八年八月十五日、仙壽は京都で客死した。仙壽は享年二十四才の若さで、スギは和を抱き抱えて涙に明けくれた。またその翌年、文政九年（一八二六）十一月四日、頼りにしていた伯母（類）が逝去、重ね重ねの不仕合

せに、安東家は血涙留め切れぬ日々を送った。

その後、スギは田染村（豊後高田市）大庄屋、河野通達之弟方朔を夫に迎え、四男一女を産み、明治十九年（一八八六）十二月二十五日、行年七十八才でこの世を去った。佐野の正覚庵墓地に、「延伎子の墓」と陰刻した墓石があり、これがスギの墓である。

延伎子の墓

（正覚庵墓地）

三浦大年之二女嫁安東仙壽生一男仙壽凶迎河野通達之弟方朔為夫生四男一女文化六年九月廿日生明治十九年十二月廿五日卒七十八

物外玄超禪定門

安東左衛門四男名義字公路一字仙壽文政八年乙酉八月十五日卒於京師二十四

貞齋大人之墓

君名和字子禮考安東仙壽妣三浦氏文政七年十一月十九日生明治廿年三月十八日卒年六十四

靈雲妙悟大姉

安藤貞齋室

慶應三年丁卯三月二日卒

トシは玄龜の三人娘の末子である。トシは杵築藩士荒木健助（立誠）に嫁した。杵築市八坂在住の久米忠臣氏が荒木氏を調査した処、荒木氏の系図から次の筆跡を確認し提供して下さった。

久保坂 荒木氏系図より

「一前略―荒木氏者本国撰州尼崎之城主也、然撰津守村昌者、織田信長之為家屬断絶而、幼若之男女遁隠、九州肥後之国加藤家出仕矣、加藤家断絶之後、豊後国府中之城主日根野候出仕矣、日根野家断絶之後、同国杵築候松平市正英親公出仕矣―

後略——(※ 右は正保より杵築藩士とある。)

嘉永元年の三ヶ所村込(江戸、大阪、杵築)の藩士帳には、

御勘定奉行 荒木彦左エ門道信 文化八年

荒木健介立誠 文政七年中小性

彦左エ門悴 荒木□藏 文政七年中小性

健介嫡子 荒木義一 安政四年

荒木完作周右エ門 天保四年

健介三男 荒木暁三 万延元年

文之助悴 荒木峰太郎 慶応二年

明治初年の藩士帳(表紙なし)

公用人添役 荒木義一

隠居 荒木健介

御右筆 荒木推夫

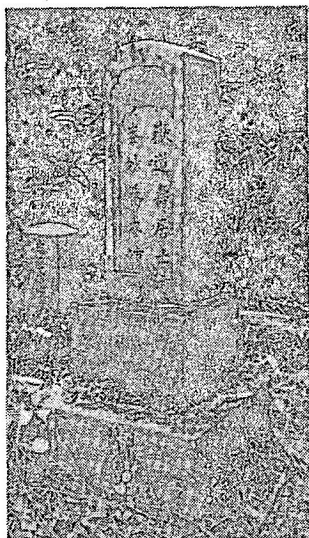
中小性 荒木木椽

荒木完吾

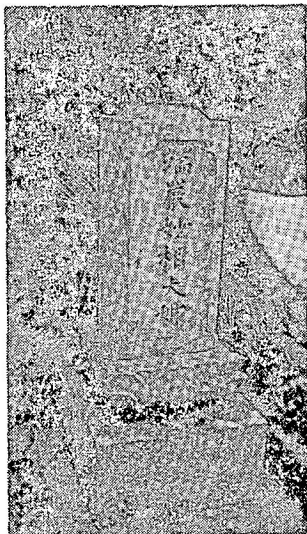
以上のように記録してある。荒木氏の菩提寺は、杵築市寺町、長昌寺であるが、荒木立誠と妻トシの墓石を発見することは出来なかった。

三浦氏に關係の深い永松・安東・小田原氏を中心に、特に三浦氏の女性關係を述べたが、墓碑の散見によって得た史料で、碑文等の解釈が不十分であると思う。読者の叱正を願ひ筆を擱く。

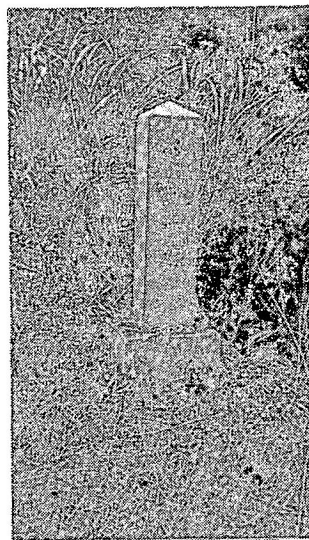
(豊後高田市郷土研究会長・



梅園三女類の墓
豊後高田市 佐野正覚庵墓地



梅園二女菊の墓
安岐町大儀寺



三浦玄龜(大年充生)
二女の墓
佐野正覚庵墓地



梅園姉
豊後高田市嶺崎
岳へら 小田原氏墓地